

解 答

一 a 飼 b 無視 c 照 d 任命

二 43〔行目まで〕

三 一日じゅうさくをながめていると、さくに囲まれて過ごすことが理屈に合わないと感じ、さくの向こうへ行って、好きな場所を自由に歩いてみたいという衝動がおさえられなくなったから。

四 「にげた」という言い方は、牧場で自由を奪われて生きていた牛の立場を表し、「さくをつき破った」という言い方は、自らの意志で新しい世界を切り開いた牛の立場を表しているというちがいがい。

五 広い世界を、自分の意志で歩き、新たな発見や出会いがあったこと。

六 せっかく自由な生活を自分で見つけ、自分だけの秘密にしていたのに、それが狸にばれ、からかわれたことに嫌気がさしている。

七 牛の木登りのことを言いふらし、みんなでからかうつもりだったのに、馬鹿にするどころか、不本意ながら賞賛しなければならなくなったから。

八 牛は木に登れないという能力の限界をうち破ったことで、他の動物たちにも、新たな可能性に挑戦する気持ちと希望を与えたから。

九 ① ・木に登った動機は、より高い場所を目指したことであったということ。

・今後はさらに高い場所を目指すつもりであるということ。

② みんなから拍手され賞賛されるうちに、自分がとても立派なことを成しとげた気分になり、みんなの期待に応えなければならないという気になったから。

十 すっかりつかれ果て、一人でゆっくりねむりたいのに、森の英雄にまつり上げられ、みんなの期待通りに木登りを見せなければならないことがっかりする気持ち。

十一 牛に過度な期待を寄せ、行動の自由を奪うもの

十二 ① 今までは、牧場の管理下、自由制限があったが、さくを破ったことで、制限から解放され、自分の意志のまま、自由に行動できる幸せな森の暮らしに変わった。

② 自分の好きなように行動できる、自由気ままな暮らしだった。が、今はみんなの期待に沿って、森の英雄として立派に生きることを半ば強制される面倒な暮らしに変わった。

③ 生活に何の不満もなかった牧場から、自分の意志で「さく」を破って脱走し、自由に満足していた。だが今や、森のみんなの期待という、自由を束縛する新たな「さく」が作られてしまった。トラックに乗ってどこかに行った牧場の牛と同様、自分ももう自由ではない立場であることにやりきれなさを感じている。

解 説

出典は、薄井ゆうじ「木登り牛」(『十二支の童話』アクセス・パブリッシング 所収)です。

いずれはトラックで搬送され、二度と帰ってくることはないことを知りながらも、牛は、おいしい牧草といい仲間に恵まれた牧場生活を、不満なく送っていた。しかし、ある日、さくに囲まれて暮らすことが理屈に合わないと感じ、好きな場所を自由に歩いてみたいという衝動をおさえられず、さくをつき破る。せまり来る追っ手に、無我夢中で木に突進した牛は、木の上にいる自分に気づく。木登りによって追っ手から逃れた牛は、森での自由な生活を満喫するが、一年後、木登りができるという秘密を森の動物たちに知られることとなる。その結果、「森の功労者」、「動物たちの英雄」などと勝手にまつり上げられ、ただ自由に生きたかった牛は、立派に生きることを強いられる立場となった自分に、やりきれなさを覚える。結局、どこにも「自由」はなかったのだと気づく牛の姿から、自由とはなにか、などさまざまなことを考えさせる寓話です。

「自由」という文章テーマをとらえ、各設問を、文章テーマに引きつけながら考えていきましょう。

問二 「あれから一年がたつ」(44行目)という、明確な時の変化を表す言葉に注目します。

問三 「その衝動」(13行目)とは、「好きな場所を自由に歩いてみたい。さくの向こうへ行ってみよう」(11行目)を指しています。「ていねいに説明しなさい」とありますから、その衝動のきっかけとなった、「一日じゅうさくをながめて～さくに囲まれて過ごすなんて、なんだか理屈に合わないんじゃないかな、と思った」(9～11行目)も含めます。

問四 文章の主題である「自由」を意識しましょう。「牛がにげた」も、「おれ」が「さくをつき破った」も、指していることがらは同じです。しかし、前者は牛を「飼」っている、つまり、牛の自由な意志を認めず、それを束縛する牧場主側の立場、後者は牛自身の立場からの表現となっているというちがいに気づくでしょう。

問五 傍線部の直前に書かれた、脱走してから、「この一年間～友人もできた」(44～46行目) ことについて、文中語を使って具体的に書くと、解答欄に収まりません。「自分の言葉で」という指示に従い、簡潔にまとめましょう。

問六 傍線部前後(64～71行目)から、「うんざりした気持」の直接の原因が「狸が笑」ったことだとわかります。さらに、

なぜ「うんざりした」のか、狸と牛の会話に注目して、狸が笑ったことから、それに対する牛の気持ちを確認します。「いいじゃないか、どこでねむったって」、「木登り牛の、どこが悪い」などの言葉に注目します。

問七 “ばつが悪い”は、その場の收拾がつかず、何となく具合が悪い様を表します。どんなことを具合が悪いと感じているのか、問六と関連させながら考えます。「だってえ、おっかしいんだもん。木の上でねる牛なんて、聞いたこともない」(67行目)と、牛を「馬鹿にした」(94行目)狸が、牛の木登りをほめそやすみんなにうながされて「馬鹿になんかしてません」、「尊敬してます」(97行目)と、牛をほめたたえる羽目になります。牛が英雄視される中、昨日の態度とは対照的な言動を強いられることが、狸には、不本意であり、恥ずかしくもあるのでしょう。

問八 「木に登れる」(84行目)ことを、みんなが「尊敬」「賞賛」しているのは、「あんたみたいな牛、見たことがない」(92行目)、つまり、普通の牛にはできないことだからです。一般的な牛の能力を超えた行為が、他の動物たちにも、さまざまな可能性があることを感じさせたのでしょう。

問九 Ⅰ インタビューに答えた牛の会話が二ヶ所あります。「より高い場所を目指した」(108行目)と「さらに高い場所を目指すつもり」(111・112行目)です。 Ⅱ みんなにほめたたえられ、すっかり、「自分がなんだかとても立派なことを成しとげたような気分になってき」(103・104行目)た牛は、「獵犬に追われて夢中で木にかけ上がったなんて、とても言えない」(109行目)雰囲気のにまれ、「ほんとかな」(113行目)と疑問を感じながらも、みんなの期待通りの答えをしてしまったのです。

問十 問六とは対照的に、ここで牛は、木登りができることをほめそやされているにもかかわらず、やはり「うんざり」しています。みんなに秘密で、気ままに行っていた木登りは、みんなの要望で強制されるものになってしまった。もはやねむることさえ自分の意志のままには行かないことに、嫌気がさしたのです。

問十一 問六・十と関連させます。自分の意志で行っていた木登りは、みんなの期待によって“やらされる”ものとなってしまいました。さらに、「もっと高く!」は、問九Ⅰで確認した、自分のついた「うそ」、「さらに高い場所を目指すつもり」(111・112行目)から出たものとはいえ、みんなの強い期待の現れでしょう。この声は、牛を、自らの意志とは関係なく、木の高みを目指すよう、押し進めるものとなるのです。

問十二 問二～十一までの総まとめと考えると、すでに自分なりに作成した解答文を参考としながら、設問の意図に合わせまとめましょう。 A 問三～問五を参考に、牧場での生活と、森での生活との変化をまとめます。 B 問六～九を参考に、木登りを秘密にしていた一年間と、木登りが狸に見つかった後の変化をまとめます。 C すべての問いを参考に、牧場での生活と、「世紀の木登り牛」(128行目)としてみんなの期待にがんじがらめにされた現在の牛の立場を対比しながら、傍線部にこめられた牛の思いを説明します。